

岩手大教育(非常勤) 中屋洋子

目的 実物資料である縮帳・織帳, 聞きとり, 郷土資料文献, 中央出版物の比較検討によって、岩手県の染織の厂史を実証的に論ずる。

方法 第一報, 第二報において、県内より発見された江戸時代後期～大正時代にわたる縮帳・織帳について各々の特徴およびそれらにまつわる状況を調査し、あわせて文献による厂史的背景の検討を試みてきた。今回 県立工業試験場の「業務報告」を検討したところ、当時の岩手県の染織の現況と技術について知見を得たので報告する。さうにこれらの記録及び標本は、自家用縮帳, 織帳の解析に有益であると思われる。

結果 大正4年前期業務報告(第一回)から昭和13年業務報告まで12冊, ならびに明治38年, 40年染織標本解説書2冊 計14冊について検討した。これらによると全体を通じて岩手県の染織の大きなテーマは、江戸時代後期から明治時代半ばまで全国的にも知られていた「南部細」の改良と復興であった。これは細織か、農家の副業として、また屑繭の利用方法として有益であるとの、県の根強い方向付けによるものである。これと平行していくつかの事業がなされたが、昭和6年までは木綿瓦斯織、昭和4年以降は絹強撚糸織物、そしてホームスパン染織の研究開発指導であった。また大正7年南部紫根染研究所が設立されるまでは紫根染の研究が行なわれたこと、大正6年度には藍がめ16ヶが新しく場内に設置されたことが記されている。また縮帳に貼付されている型と類似の標本もみられた。同報告に用いられている染織用語を用いて縮帳・織帳を記述することはより妥当性を増すと思われる。